**週刊やすいゆたか87号13年６月６日**

**いよいよ三貴神が天降りして倭人三国を建国**

**したという伝承が記紀以前にあったのではないかという仮説が、まとまりをみせてきたので、それを素描して、読者にも御一考願えればと思う。**

**もとより記紀の矛盾からの類推の域をでない**

**が古代史の見直しする際に、この仮説の存在が既**

**成の古代史像からは見えなかったものを見る一**

**助になるのではないかと思う。**

# **『倭人三国伝ー三貴神の天降り仮説』構想素描**

　　 **１口誦『倭人三国伝』の存在**

 　日本建国史というのを考える時にイワレヒコ(神武天皇)の東征で建国を捉えがちである。その考えは東征に当って筑紫倭国がまるごと東征したという前提があるが、実はそうではない。イワレヒコはニニギの一夜妻のコノハナサクヤヒメが生んだ火遠理命の孫である。彼らは宮殿には住んでいない。猟師をしていたの である。
　一応認知されていたとしても、王統は継げなかったので、ニギハヤヒ王国を侵略したのである。だから筑紫倭国とニギハヤヒの太陽神の大和倭国とは並存していた。それを乗っ取ったイワレヒコを祖とする大和倭国も筑紫倭国と並存状態だった。もう一つ出雲倭国があり、実は『倭人三国伝』という口誦説話があったハズでる。
　この元の倭人三国を建国したので、三貴神とされたのがアマテラス、ツクヨミ、スサノヲである。実は天降りは元々は三貴神の天降りであったのだ。ところが大和倭国による統合で、歴史も大和倭国史に統合してしまったために大幅な書き換えに成ってしまったということである。

　**２　アマテラスの大和倭国建国**

　もちろん太陽神の国であった大和倭国を建国したのはアマテラスであり、筑紫倭国はツクヨミであり、出雲倭国はスサノヲである。ところが歴史の書き換えで大和倭国の祖先神をアマテラスとすることになり、アマテラスを昇格させて高天原の主神にした。そのためにアマテラス自身は天降りできなくなった。
　そこでアマテラスの孫のニニギの命を天降りさせたと『古事記』ではなっているが、その前提にアマテラスとスサノヲの誓約(うけひ)がある。そうすると筑紫を建国したのは太陽神の孫ということになってしまう。ツクヨミの建国は浮いてしまうのである。
　畿内のヤマトはニギハヤヒ王国つまり太陽神の国である。だからニギハヤヒこそアマテラスの孫である天火明命(あめのほあかりのみこと)なのである。 だから筑紫の高千穂に降ったというニニギはツクヨミの孫であるはずである。ということは誓約を交わしたのは元の伝承ではツクヨミであったことになる。
　イワレヒコがニニギの曾孫なので、イワレヒコの子孫の大和倭国による統合後にニニギの祖母は主神になったアマテラスということに変更したのである。だから誓約がアマテラスではなくてツクヨミであったという論証が極めて重要である。

　**３　スサノヲと誓約したのはツクヨミか**

　『古事記』ではスサノヲの剣をアマテラスが噛み砕き、狭霧に吹き出して宗像三女神を生んでいる。アマテラスの珠をスサノヲが噛み砕き、狭霧に吹き出して天忍穂耳命を産む。剣と珠は男と女のシンボルである。だからアマテラスは女神という解釈だった。しかし太陽が女で月が男では陰陽説とはさかさまである。
京葛野の松尾大社の月読命像は女性的だ。

　ニニギをアマテラスの孫にするために誓約をアマテラスにしたためにアマテラスを女神にしてしまったのである。その背景に、推古女帝か持統女帝の実現 を図りやすくする動機があっただろう。ツクシをツクヨミの国と考え、ツクヨミがスサノヲと誓約をしたという説話なら、そういう矛盾はなくなる。
　ツクは月の古音である。ツクヨミというのだから。「つく・し」の「し」は「じ(地)」が清音化したのではないか?「月地」だと「月の国」と解釈で き、月読の支配下にあったところの意味である。「月読」とは月の満ち欠けで暦をつくり、祭事や農事を決めて統治していたのである。
　ツクシ(筑紫)は陽光があふれる南国なので、かえって陽光のありがたさに対する信仰は畿内よりも希薄だったかもしれない。それに比べて畿内では太陽と水の恵みが重要だった。
　元々倭国は加羅に本拠があって、そこから海に進出し、壱岐を中心にして奴国を極南界にする海洋民族の国だった。加羅、対馬、壱岐、博多付近にある津の連合国家である。水運と漁業が中心である。イザナギ、イザナミの段階では、壱岐に中心が移っていた。
　大八洲への植民は既に進んでいて、そこに貴重な半島の物資を運んでいたのである。彼らの目標は大八洲に国を建てることだった。それでアマテラス、ツクヨミ、スサノヲたちをそれぞれ天降りさせて大和倭国、筑紫倭国、出雲倭国を建国させたのである。

**４　天磐舟に乗って**
　大和倭国は、『古事記』ではニギハヤヒが天磐舟で行ったことになっているが、もちろん空飛ぶ船ではない。空と海は一体的に捉えられていた。磐の船はないが、おそらく船底に大きな石を敷き詰めたのではないか。日本海は荒れやすいので、転覆を防ぐために、重心を低くしたのである。
　ニギハヤヒではなく祖父のアマテラスが河内湖に入り、イザナギの顔が利いて、物部氏の祖先たちに歓迎されたのである。恐らく鏡などの太陽神の祭器をもってきたので、太陽神と認められたのであろう。
　物部氏は琵琶湖の北東に隣接する余呉湖に住んでいた。あるいは但馬あたりに天磐舟が着き、そこにいた物部氏に歓迎され、一族を率いて淀川を下って河内湖畔に太陽神の国を建てたのかもしれない。孫のニギハヤヒの代になって生駒山を越えて三輪山周辺まで勢力を拡大したのである。

**５　消されたツクヨミ**

　三貴神の一つと称えられながら、月読命の行跡は記紀からは抹消されている、わずかに保食(うけもち)神が口から食物を出して饗応したのに対して汚らわしいと切り殺した話がのこっているだけである。恐らくツクヨミを男神だったと思わせるために遺した話だろう。
　ツクヨミの話を抹消したのは、彼女こそニニギの祖母であり、残しておくと大王家の祖先神が月読命だったことが分かるからではないかと推測される。
　つまり畿内に来た大王家は、祖先神をツクヨミからアマテラスに乗り換えたのである。アマテラスはニギハヤヒの祖父であり、物部氏が有力な間はできなかったが、六世紀末に蘇我物部戦争で物部宗家が滅んで、絶好のチャンスになった。
　つまり畿内は農耕中心なので太陽神信仰が中心でないと儀礼を大王家が仕切れない。大王家の儀式は夜の儀礼だったというから、天御中主命、オリオン三星(三筒乃男命)、月読命などを祀っていたのである。
　物部氏の祖先神をニギハヤヒとし、物部氏の太陽神信仰をニギハヤヒに限定して、アマテラスを大王家の祖先神に位置づけ直したのである。そのために誓約をアマテラスにした。そのせいでアマテラスは女神化された。同時にアマテラスは高天原の主神に格上げされたので、天降りは孫のニギハヤヒにずらされたのである。
　主神の座を降ろされた天御中主命は、隠れてしまったことになっている。しかしそれではこれまで主神として崇めてきたのにあまりに失礼で、祟るかもし れない。そこで大王を隋唐にならって皇帝にするが、その称号を対内的に天御中主命つまり北極星を意味する天皇大帝を言い換えて天皇にしたのである。

**６　スサノヲの出雲建国**

ではスサノヲの出雲建国の経緯はどうか、かれは海原は支配せよと言われた。つまり壱岐に残って海洋民族を率いていたのである。母イザナミを恋しがって仕事をせずに泣いてばかりいたというが、それは日本海が荒れていたということである。
　だから漁も水運もうまくいかず、食糧も尽きてきた。そこで高天原でなく、筑紫の姉ツクヨミに救援を求めに行ったが、スサノヲが来ると天候も荒れるし、来襲と思って身構えた。それで侵略の意図がないとするスサノヲと誓約をして、宗像三女神を生んでいる。それは筑紫の北岸沖だから、ツクヨミがスサノヲの剣 から産んだのである。
　ツクヨミの珠からスサノヲが豊穣神である天忍穂耳命を生む、物実がツクヨミの珠だからツクヨミの子だとして、ツクヨミは天忍穂耳命を継承者にしようとするが、高御産巣神が実権を握っていたので、外戚支配をするためにニニギが王位継承することになったのである。
　スサノヲは誓約に勝って、しばらく筑紫に居座り、壱岐の救援をする。しかし元々が乱暴な性格なので、イザナギの勘気に触れて、追放され、壱岐にも戻れず出雲に行った。そこで八岐大蛇を退治して出雲の建国神になったということである。出雲は八岐大蛇という越の勢力の支配から脱却したのである。

　　　　**７　三国争乱伝承**

スサノヲの孫の世代になって日本のアレクサンダーのような大英雄が出現する。それが大国主命である。彼は兄弟たちの勢力争いで何度も死にかかった が、奇跡的に助かり、その度に強くなって、兄弟を駆逐して出雲の王となり、宿敵越を攻めて属国にする。さらに信濃から畿内を制圧し、ニギハヤヒを屈服させた。
　さらに北四国まで制圧して文字通り大国主命になる。それからは平和で豊かな国づくりに邁進し、ニニギの筑紫倭国とも友好関係を保とうとするが、筑紫倭国は、併呑されることを恐れて、半島からの最新武器で武装し、周到な計画の下で、電光石火の奇襲作戦で、オオクニヌシを追い詰めた。その指揮をとったの がタケミカヅチやフツヌシである。
　結局、オオクニヌシは自害させられたが、その人徳を慕う勢力は根強く、タケミカヅチたちは出雲大社を作って怨霊を鎮めようとするが、大和の支配は維持できず、ニギハヤヒたちが勢力を盛り返して、筑紫勢力を駆逐してしまった。最盛期のニギハヤヒ王国が再建されたのである。

　　**８　イワレヒコ(神武)東征**

イワレヒコはニニギの曾孫なので、そのイワレヒコがニニギの『古事記』では兄にあたるニギハヤヒを倒すというのは無理がある。ニギハヤヒからはその名を代々襲名したのかもしれない、ニギハヤヒ三世か四世が、イワレヒコに敗れて臣従することになった。
　しかし物部氏は勢力を残していたので、太陽神の祭祀権を確保することができたのである。イワレヒコはニニギの曾孫だが、一夜妻の子の孫とい　うことでせいぜい地方豪族である。だから東征後も筑紫倭国はそのままである。

**９、四世紀の三国統合伝承**

　四世紀オオタラシヒコ(景行天皇)は熊襲の攻勢でピンチになった筑紫倭国を救援に筑紫に赴き、熊襲を制圧したが、戦乱で筑紫倭国は衰退し、後継者がいなくなって大和倭国に併合されてしまったのである。出雲倭国は筑紫倭国に服属していたが、熊襲の攻勢に筑紫倭国が衰退した隙に、独立を取り戻した。
　オオタラシヒコは大和に凱旋したが、数年にして熊襲は貢をよこさなくなり、城の修復を始めた。出雲倭国にも貢を要求したが生返事である。
　そこで小碓皇子が熊襲征伐に出かけ、見事に熊襲タケル兄弟を征討し、帰りに出雲にもよって出雲タケルを騙し討ちにして、三国の統合に成功する。
　小碓皇子の凱旋後まもなく、尾張の国造の館が蝦夷に襲撃される事件が起こり、急遽小碓皇子は巡察使として東国に派遣される。ヤマトタケルとしての英雄的な活躍で、東国の蝦夷の不穏な動きも十数年にして収まり、ヤマトタケルは大和に戻ろうとするが、最後伊吹山の仕事で氷雨に撃たれ、深手を負い病没する。
　説話としては、死後ヤマトタケルの霊は白鳥になって河内湖に戻り、数年後に河内葛城で葛城高額媛に憑りついて、オキナガタラシヒメはヤマトタケルの 霊を宿して誕生し、英雄物語を引き継いでいくことになる。

**10　東西二朝分裂とオキナガタラシヒメ**　オキナガタラシヒメはヤマトタケルの御子タラシナカツヒコ(後の仲哀天皇)と結ばれるが、ワカタラシヒコ(成務天皇)に謀反の嫌疑をかけられ、武内宿祢と共に筑紫に逃亡して、筑紫勢力に担がれて倭国は東西二朝に分裂する。
　ところがタラシナカツヒコは 熊襲との攻防に手を焼き、大和制圧どころではなくなる。
　そこでオキナガタラシヒメはアメノミナカヌシと住吉三神のお告げとして新羅攻めをタラシナカツヒコに薦めるが、相手にしないので、死んでしまえと叫んだら、本当に死んでしまった。そしてなんと夫大王が亡くなったばかりなのに、オキナガタラシヒメは上筒之男命と男女の契りを交わして、新羅征討を決断する。
　オキナガタラシヒメは見事に新羅を侵攻して、その余勢をかって東朝を滅ぼし、倭国再統合に成功し、憑依した神に感謝するために住吉大社を創建した。
　当然住吉大社は、アメノミナカヌシと住吉三神を祀っていた。しかし、主神差し替えによって、オキナガタラシヒメ説話も変更される。彼女には、天御中主命ではなく、アマテラスが憑依したことになる。
　住吉大社にも天御中主命をアマテラスに差し替えるように要求されるが、禰宜の津守氏は天御中主命やニギハヤヒの祟りを恐れ、アマテラスの祭祀を断る、その替わり天御中主命を降ろさざるを得ないので、そこにオキナガタラシヒメを祀ることにした。
　その際の理由がオキナガタラシヒメは上筒之男と一緒にいたいと言っていたので祀ることにしたと『住吉大社神代記』で神官津守氏は述べている。これは 仲哀天皇に対する冒涜であり、中臣神道から言えば不義不忠そのものだが、住吉大社は天皇家や藤原氏に相当の怨恨を持っていたのである。

以上『倭人三国記』の要旨をかいつまんで記述してみた。どういう文体にするか、歴史物語にするか、記紀の矛盾を解明する謎解きにするか、あるいは戯曲やファンタジーも考えられるができれば今年中には書き上げたい。